

平びらびら伝

其の一

耳なし芳一直後談



金井哲夫

深夜といえどまだ蒸し暑く、湿った黒い空気は重く地に這って動かず、草の葉ひとつ動かすことも許さなかった。

ただ虫の声だけがやかましく、詣でる者もなく荒れ果てた古寺の苔むした墓石に、甲高い念仏を唱えているように聞こえた。

新月の暗闇の中、ひととき大きく威厳のある墓石だけが、ぼんやりと青白く浮き上がっている。大きなホタルのようなくつもの鬼火が墓石を取り囲んでいるのだ。ただしそれらはゆらゆらと青い光を瞬かせるものの、虫の念仏に聞き入るかのように宙の一点に浮かんでじっと動かない。

そのとき、鬼火たちが一齐に身じろいだ。やがて、墓地の入口あたりから、虫の声に混じって、がしやり、がしやり、と金属や乾いた木片の触れあう鈍い音が断続的に聞こえてきた。

音は生い茂って夜露に濡れた夏草を掻き分け、ゆっくりと近づいてくる。すると、鬼火の淡い光によって押しつけられた湿った闇の壁の一部が膨らみ、そこから黒いものがぬうつと染み出て、鎧姿の武士の姿になった。全身が泥にまみれ、鎧の袖や草摺は糸が擦り切れところどころが無残に垂れ下がっている。今戦場から半死半生で逃げ出てきたような武士、というよりは、ぼろぼろの甲冑だけが歩いているように見える。

ここは源氏との戦いに敗れ、都落ちした先で惨めな最後をとげた平家一族郎党が眠る

墓地。住職もいない荒れた古寺で供養する人間もなく、現世に強い未練と恨みを残しているため、成仏できない亡霊たちが夜な夜な暇をもてあましていたのだ。

そこへ、近所の武家屋敷に名人と名高い琵琶法師の芳一が滞在していることを知り、毎夜、芳一を騙して墓地へ連れ出しては平曲を歌わせた。今晚も、武者の亡霊が1人、芳一を迎えに行つたところだった。

鎧は大きな墓石の前に歩み出ると、立て膝をつき、片方の拳を地面に付け頭を垂れた。「ただ今戻りましてござりまする」

鎧は低い声で言った。しばらく間を置いて

「芳一はどこじゃ」と、姿を見せない女の声が返ってきた。

高貴な女であるらしいことは、その話しぶりだけでなく、その言葉にたじろいだ鎧の様子からもわかる。

「ははっ」

鎧は地面に立て膝をついたまま、わずかに後ずさり、さらに身を低くして、やや早口に答えた。

「例のごとく阿弥陀寺へ赴きましたところ、芳一の姿がなく……」

周囲で鬼火が揺れ動き、人のざわめきがかすかに聞こえた。

「あるのはふたつの耳ばかり。仕方なく、その耳をば持ち帰りましてござりまする」

鎧が黒い手甲に半分かくれた拳を差し出し、手の平を上に向けて指を開くと、血まみれの耳がふたつ現れた。

「芳一の耳にてござりまする」

鬼火がざわめく。

しばらく後、女の声があった。

「それがなぜ芳一の耳だとわかる」

鎧は芳一の耳であることを少しも疑っていなかったと見え、そう質問されて虚を突かれたようにしばらく口をぱくぱくさせてから、はっと何かを思い出し、自信に満ちた態度になって答えた。

「はい、近くに芳一の琵琶が置かれておりましたゆえ」

重い沈黙が流れた。虫たちも念仏を止めて押し黙った。

しばらく経ち、また虫たちが鳴き始めたこ



ろ、女が静かに言った。

「たしかか」

「たしかにござりまする」

鎧はすでに胸を張り、笑みすら浮かべている。

「本当に芳一の耳なのだな」

「間違いございません」

女は黙った。

様子をうかがっていた虫たちが、安心してまた大きな声で鳴き始めた。

鬼火たちは押し黙り、女の次の言葉を待った。

「ばか」

女が言った。

「ははっ」

鎧は反射的にかしこまって頭を下げた。反射的に頭を下げたので、女がなんと行ったかは、本当には聞こえていなかったのだが、当然、褒めてもらったものと思っていた。

しかし、ここは単純に喜んだりしては格好が悪い。こんなときこそ、苦虫を噛みつぶしたような顔をして、かしこまるのが武士たるもの。

そのまま頭を下げて次なる称賛の言葉を待っていると、また女は静かに言った。

「ばか」

今度はちゃんと聞こえた。そのまましばらく頭を下げていた鎧だが、ちよつと顔を上げて聞き返した。

「ばか……つて言いました？」

鬼火たちが細かく上下に震えている。必死に笑いをこらえているのだ。

「馬鹿でしょ？ 耳なんか持つてきちやつて」

「いや、その、しかし耳しかなかったのだから、こうするより他に……」

鎧はこれが適切な判断であったことを主張するかのごとくに身を乗り出した。

「じゃあ、この耳が平家物語を語るわけ？ 耳がどうやって琵琶を弾くの？」

「そ、それは……」

「あのねえ……」と女の声が鎧の近くで聞



こえた。驚いて鎧が顔を上げると、そこには十二単の女性が立っていた。業を煮やしてついに姿を現したのだ。鎧はますます恐れ入り、お尻が闇の壁にくつつくぐらいついで後ずさった。女は片手に持った折りたたんだ檜扇を、もう片方の手の平にぼんぼんと叩きつけながら、必死にイライラを抑えようとしている。

鬼火たちはひそひそと何やら囁きあっている。くすくすと笑う声も聞こえる。虫たちも、ことの成り行きを聞き逃すまいと声を潜める。

「じゃあ聞くけど、この耳はどこにあったの？」

女は小学校の女教師のような口調で尋ねた。

「寺の縁側の琵琶の近くでございます」

鎧は顔を上げずに答えた。

「そこにぺろっと落ちてたの？」

「いえ、このつくらいのところに、こう2つ浮かんでおりました……」

鎧は起き上がり、正座をしたまま手を自分の目の高さの当たりに持ち上げた。

「右耳と左耳は、どのくらい離れて浮かんでたの？」

「はい、このつくらい……ですかね」と鎧は両手の人差し指を立て、人の頭の幅ぐらいに開いて見せた。

「それはほんとーに、芳一の耳だったのか？」

「ええ、そりや確かでございます。芳一を送り迎えするときや、ここで芳一が語っているとき、私は脇から芳一の顔をずっと見ておりましたから。貧相なくせに意外に福耳だなーとか、耳の穴に毛が生えてるなーとか、つぶさに……」

「わかった」

女の声が鎧の説明を遮った。

「お前の右耳と左耳の間には何がある？」

そう聞かれて鎧は、何かを考えるようにややうつむいたまま、手の平で自分の額を触り、はっと気がつき顔を上げた。

「私の頭でございます！」

何か大発見をしたかのように、鎧は早口に言った。

「寺の縁側に浮かんでいた芳一の右耳と左耳の間には、何があったと思う？」

鎧はまた何かを考えるように首をかしげ、寺の状況を思い出しつつ、宙を探るようしきりに両手を動かした。やがて手の動きが止まり、煮え切らない様子で顔を上げて言った。

「何も……ありませんでしたけど」

「お耳はふわふわ浮いてたの？」

女はあきれた声で聞いた。

「いえ」

「それを取ったとき、チヨウウチヨを捕まえるみたいになんか抵抗があった？」

「ええ、こう、べりべりって感じですね」

鎧は両耳を左右に引き裂くような仕草を見せた。

「で？」

「耳があつたところから血がぼたぼたと……、わあーっ！」

鎧はようやく気がついたように膝を叩き、うろたえて正座の姿勢が崩れて尻餅をついた。

「寺の僧侶が芳一の体に経文を書き、我ら死霊の目には見えぬように細工を施したのじゃ。だが耳だけは経を書き忘れたのだろう、そこだけお前にも見えていたのだわよ！ もう、ホントに馬鹿ばっかり！」

ついに女は怒りをあらわにして言った。

「あららら、気がつきませんでした。今から戻って芳一を引きずって参ります！」

鎧は慌てて立ち上がり闇の中へ駆け込もうとしたが、女がそれを止めた。

アタマトハ耳ト耳ヲ接続スル部分ヲ云フ



ニンゲントハ耳ヲ運搬スルモノナリ

それとも、

「どうやって連れてくるというのだ。唯一、芳一の居場所がわかる目印だった耳を、お前が取ってきちゃったのだぞ。もうどこにいるか、わかぬわい」

「あちゃー、そうでした」

鎧は肩の力をだらりと抜いて、だらしなく向き直った。

「責任を取りなさい」と女は冷たい声で言った。

鎧はその場に崩れ落ち地面に両膝を付くや、腰の刀を抜き自分の腹に突き刺した。

鎧の背中から錆びた刀が突き出る。鎧はそのまま動かなくなった。

しかし周囲の鬼火は冷ややかにそれを見つめていた。女も無表情に、檜扇をぽんぽんさせる手を止めもせず見下ろしている。

しばらくして、はあと溜息をついた後に女は言った。

「終わった？」

鎧はぼつが悪そうに体を起こし、腹に刀を突き刺したまま、両手を真っ直ぐにして膝につき、背中を伸ばして首だけをうなだれた。

「死ねば済むってものではないのよ」

「はい」と鎧は小さく答えた。

「だいたい、もう死んじやってるんだから。犬が三遍回ってワンって言うのと同じでしょ。面白くもなんともないでしょ」

「はい」

「死ねば許されるみたいな甘えは、死後の世界では通じないのよ」

「は……」

鎧の声がだんだん小さくなっていく。

「あんた、なーにやってもダメね」

「へえ……」

鎧の声はだんだん涙ぐんできた。

「壇ノ浦で最初に死んだの、あんたでしょ？」

「うう……」

「ひとりで舞い上がって、調子に乗って、敵を挑発しようとしてお尻ペンペンとかしたとき、バランス崩して船から落ちたのよね。なーんの役にも立たなかったのよね。合戦が始まる前だったしね」

「……」

鎧は肩を震わせた。

Dan-no-Ura



「だから、責任をとりなさい」

「し、しかし、何をすればよいやら……」

顔を伏せたまま鎧は涙声で言った。

「芳一のかわりに平家物語を語れ」

鬼火たちが「ええー！」とバラエティー番組の効果音のような声をあげた。

「にやあ？」と鎧はすつとんきような声をあげた。

「芳一の語りを楽しみにしてたのに、お前が台無しにしてしまったのだから、責任をとって平家物語を語れと申しておる」

「私が？」

「できぬのか？」

「いや、それは……」

「芳一のような語りは微塵も期待しておらぬ。お前がへたくソな語りをして恥をかくところを見て、このイライラムカムカした絶望的な気分を笑い飛ばさうというのだ」

鬼火たちは「おおー！」と歓声をあげた。パラパラと拍手も聞こえる。ひゅひゅーと口笛も聞こえる。

女は檜扇をぽんぽんさせながら、意地悪な笑みを浮かべた。

「語れ」と女は冷たく言う。

鎧はその場に座ったまま俯いた固くなっている。

「かーたーれ」

女は語気を強めた。

すると周囲の鬼火たちも、最初は小さな声で、次第に大きな声で「かーたーれ、かーたーれ」と囃し立てた。つられて虫たちも「りーりーりん、りーりーりん」と調子を合わせて鳴きだした。深夜のじめじめと蒸し暑い陰気極まる墓場の一角にわき上がった陽気な語れコールが不気味に響きわたる。

やがて女は、鎧を見下ろしたまま檜扇をさつと横一文字に振り、語れコールを制した。鬼火も虫も押し黙る。鬼火たちのはしゃぐ陽気によって少しだけ押しやられていた闇が、またぐっと押し迫り、黒い壁を厚くした。にわかには、さらさらと生ぬるい小雨が降ってきた。それはあたかも、その後彼らをどんな恐怖が襲うかも知らず無邪気に騒ぎ立てる亡霊たちへの、控えめな無言の警告のようでもあった。

「どうじゃ」と女が改めて促す。

すると鎧はようやく顔を上げた。首の後ろを片手でぼんぼんと叩きながら見せた顔は、にやけていた。

「そこまで期待されて、お断りし続けるのも野暮というもの。それでは、ほんのサワリ

だけ……」と鎧はゆつくりと立ち上がった。

「えーと、どこがいいかな」と、鎧は神妙な顔をして、右手で手刀を切るような仕草で方々に体の向きを変えた。そしてしばらく考えた後、「うん、ここだここだ」と大きな女の墓石の正面にある、小さな墓石の前であぐらをかき、どこに隠し持っていたのか琵琶と撥をビヨンビヨンと調弦を始めた。

それまで冷やかしか半分ならぬ、ひやかしか全部だった周囲の雰囲気が一変した。女も「こいつ、心得があるな」と悟り、この場をどう収めようかと思いを巡らせ、生きていたときならさぞ胃が痛くなつたろうと想像するだに気が滅入った。

素人に下手な平曲を語らせて馬鹿にして楽しもうという趣旨は、鎧の妙に玄人じみた行動で吹き飛んでしまった。名人芳一ほどとは言わないが、そこそこ聴けるなら、それはそれで娯楽になるが、この鎧のように玄人ぶった素人は厄介だ。

「ぶわっほん！ ああーっ！ おーおー、いーいーいー。あっほん！ があー！」
鎧は発声練習のつもりか奇声をあげる。

公家の血を引く平家の（元）人間として当代一流の歌舞音曲に浸ってきた女は、よくわかっていた。ダメな素人ほど始める前がやかましいと。芳一は静かにやってきて、咳払いひとつせず、静寂の中で観客の期待と緊張感が高まったところへ、効果的に琵琶を鳴らす。それが玄人の芸だ。だが素人はやたらと音を出す。さらに、ダメな素人に限って、

始める前に言い訳とともれる説明が付く。

「芳一さんのようにはいきませんが……」

そらきた、と女は身構えた。気がつくくと、周囲の鬼火たちも同じことを察したのか、少し遠ざかっているように見える。虫の声も、さつきよりもやや遠くに聞こえるような気がする。

「私の場合、武士でありますゆえに、『拾』に迫力を持たせております。芳一さんは、たしかにうまいです。『素声』、『歌』、『折声』などは、さすがと人を唸らせるものがあります」などと、相手を持ち上げるかに見えて、じつはそうではない。

「が……」

やっぱり。思ったとおり、一旦褒めてから批判する。相手を批判することで己の技術の低さをごまかそうとする、姑息な素人の常套手段だ。

「……いかんせん法師でありますから、拾が弱い。実際の戦場を見た者でなければ、語れない部分がございます。いや、芳一さんはたしかに名人であります。名人ではあります、私に言わせれば……」

「わかった」と、女は鎧の解説を止めた。ダメな素人の解説は、かならず他者の批判に終わる。聞けば聞くほど不愉快になる。だが、この先どうしたものか。自分たちが語れ語れと囃し立て、その気にさせてしまった手前、語らせないわけにはいかない。始める

前にやかましい、他人の批判に帰結する、得意げに専門用語を羅列する前置き、とダメな素人の要素が揃えば、もうひとつ、もつとも恐れるべきダメな素人の要素が必ず出現する。始める前がやかましいければやかましいほど、前置きが長ければ長いほど、芸が下手なのだ。いやただ下手なのではない。本当に下手くそならば笑い話で済むが、厄介なことに、それほど下手でもない。だが上手くもない。その中間にあつて、玄人もどきの小技をからませるものだから嫌味で気持ちが悪い。聞いている人間に自然に身もだえを引き起こす。それでも本人は自分がいちばん上手いと思いつているから語り出すと遠慮がない。

「それでは、大変ながらくお待たせいたしました。うえっへん！ ただ今より語らせていただきます。おっほん！ あーあー、うふん。では……」

「待て！」と女は慌てて言った。

「私が合図をしたら始めるのだ、よいな」

そう言うと、女はすーっと大きな墓石の向こう側に移動した。見ると、鬼火たちはとつと十分な距離をとっている。心なしか、数も減っている。

「では、どうぞ」

女は扇でキューを出しつつ緊張して言うと、さっと墓石の裏に身を隠した。

「それでは……」

びよ〜ん。びよびよびよびよ〜ん。この世の物でなくなつて久しい、この世の物でないことのプロである亡霊たちにしてみても、この世の物とは思えぬ不気味な音が響いた。

「ぐえんずいのつはものどむあー！ すーでーにふえいくえのふねにのりうつりけれぶわあ〜」

びよ〜ん。

「くわこくくあんどりどむあー、ういころさるえー」

びよよよ〜ん。

「あ、はい！ あの、ちよつと……」と女が墓石の影から恐る恐る顔を出し、手を上げて口を挟んだ。

「は？」と鎧は撥を止めた。

「牛と豚が相撲をとる段などあつたか？」

「いえ、これは壇ノ浦の冒頭でございますが」



「壇ノ浦とな？ 源氏の兵どもはすでに平家の舟に……というのが芳一の出だしだったと思うが、ずいぶん赴きが違うな」

「さようでありましょう。拾の迫力においては芳一に負けませぬ」

鎧は誇らしげに言った。女はそういう意味で聞いたのではなかった。

「そ、そうか。それは、長いのか？」

「本日はたっぷりとお聞かせいたしまする！」

「わ、わかった。続ける」

女は、「続ける」と言ってしまった自分を呪いつつ、力なく墓石の裏に崩れ落ちるように姿を消した。

「ふわっほん！ ふねーぞーこーにーたーはーれーふしにくえりいー！
びよびよくん！

鎧の平曲もどきはえんえん続いた。

鬼火たちは、鎧の声をまともに受けまいと、地面近くまで高度を下げたり、墓石の裏に隠れたり、用もないのにあちこち飛び回ったりしていたが、とうとう力尽き、ひとつふたつとそれぞれの墓石の中に消えていった。しかし、自分の墓石にたどり着けず、途中で力尽きてポタリと泥の中に墜落するものもあった。

気がつけばあたりは真っ暗。ただひとつ、小さな鬼火が鎧の真ん前に浮かんでいる。

「あれ、みんなは……？ 寝ちまったのか。芸術に理解のない連中はこれだから困る」

そのとき鎧は、目の前の小さな鬼火に気がついた。

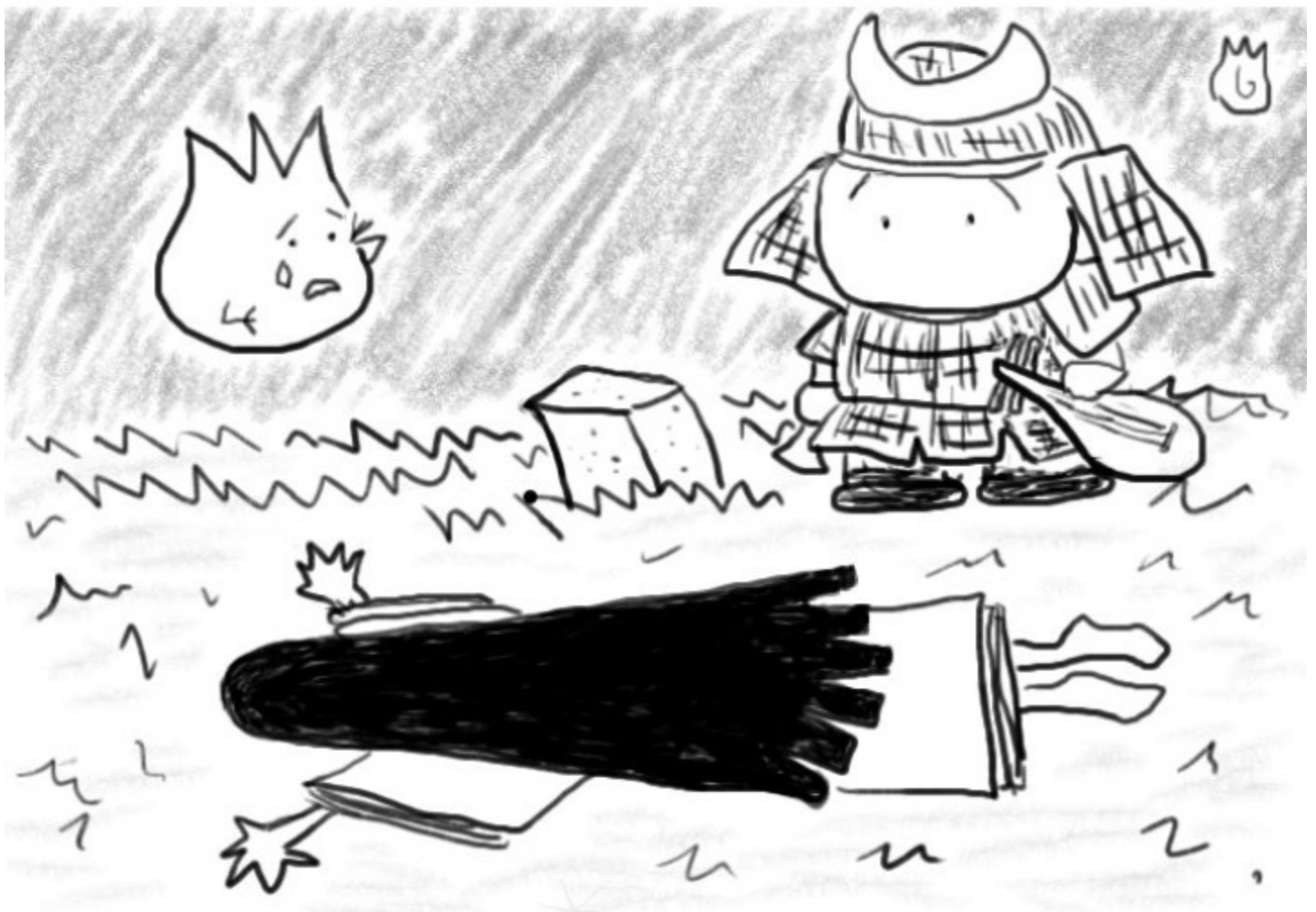
幼い女兒の鬼火は、しくしくと泣き声をあげている。

「おお、お嬢ちゃん、おじさんの話がそんなによかったかね？ ん？ 言ってごらん、どこで泣けたのかい？」

すると鬼火は鎧が背にしている小さな墓石を指さして言った。

「違います。そこが私の寝床なんです」

平びらびら伝 其の一のおわり



平びらびら伝

<http://p.booklog.jp/book/58282>

著者：金井哲夫

絵：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58282>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58282>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ